

## アメリカの偉大な女性達(Ⅰ)

—— アグネス・スメドレーとパール・バックの生誕百年によせて ——

### 坂 本 ひ と み

#### 1 はじめに

いかにもアメリカの大地が生み出した、と思えるような、スケールの大きい堂々たる人生を生きぬいた女性達がいる。私が敬愛してやまないそのようなアメリカ女性の中から、ここでは、今年でちょうど生誕百年を迎えるアグネス・スメドレー（1892～1950）とパール・バック（1892～1973）をとりあげてみたい。また今年は、日中国交回復20周年でもあり、中国を愛したこの二人に、もう一度、光をあててみるのによい機会といえよう。

スメドレーとバックは、生まれや育ちは大きく違うが、どちらも20世紀前半の激動期の中国に暮らし、中国の民衆を描き、自由と民主主義を求め、訴え続けた作家である。また二人とも、大地に根ざし、大地を愛した女性であり、作品のタイトルも、スメドレーの自伝的小説が『大地の娘』（1929年出版、*Daughter of Earth*、邦題『女一人大地に行く』）であり、バックの中国民衆の生きざまを描いたノーベル賞受賞作品が『大地』（1931年出版、*The Good Earth*）である。貧農の娘として生まれたスメドレーは、生涯、畑仕事を愛し、監獄生活を送っていても、友人の家に寄寓している時でも、菜園作りに熱中した。バックも、知的に洗練された美しい都会派婦人の顔も見せるが、その本質には、ペンシルヴァニアの農場のおかみさんという素朴さを持っている。

1949年、中華人民共和国が成立した時、スメドレーは大いに感激し、中国に戻りたいと願いつつ、その翌年死を迎えたが、彼女より23年長生きしたバックは、共産主義の中国に一度も足を踏み入れることはなかった。二人の間には考え方に大きな隔たりもある。それでも、1942年、ニューヨークで一緒になったスメドレーとバックは、互いに好意を持ち合い協力して、新生中国のために闘ったのである。

私は、スメドレーとバックの双方と懇意であった石垣綾子氏に師事し、その印象を伺いながら、この度、アメリカの歴史家によって書かれたスメドレーの伝記を訳し終えた。その彼女の徹底した闘いぶり、炎のような生涯は、歴史の枠をのりこえて現代の若い女性にも訴えるものがあると確信する。一方、『パール・バックのアメリカ』（1971年）という、彼女のア

メリカに対する想いのたけを綴った本は、ヴェトナム戦争にゆきづまったアメリカ人の自己批判の風潮が高まり、ネイティヴ・アメリカン（アメリカ・インディアン）に対して行なってきたことへの反省が強まった気運を背景に書かれたもので、私の愛読書の一つである。この本のエピローグにある、「どうしたら、我々の生活様式から戦いというものをなくすことができるのか？ 異った民族間、世代間、両性間に、どうやってよりよい関係を築いていったらよいのか？」<sup>(1)</sup>という彼女の問題意識は、まさに私が何年も前から抱いているテーマそのものである。

この論考では、二人の女性の共通点、相違点を検討しつつ、彼女達の生き方が現代の私達に教えてくれること、そして私達がひきついで考え、実践していかなければならないこと、いや、一人の女として私自身がどう生きていくべきかということを探っていきたい。

## 2 スメドレーとバックの生涯

### i) 生いたち

アグネス・スメドレーは、アメリカのミズーリ州オズグッドで、貧農の次女として生まれた。年代はだいたい1890年から94年の間のことであるとされていた。代表的な伝記年鑑には1894年とされていたが、正確なところは自分自身もわかっていない、とスメドレーは石垣綾子氏に話したそうである。生年月日さえもはっきりしていないということは、彼女の生いたちがどんなにみじめであったかを象徴しているといえよう。この度、伝記の著者マッキンノン教授の調査によって、彼女の正確な生年月日は1892年2月23日であることが裏づけされた。石垣氏の著書『回想のスメドレー』には次のように書かれている。

スメドレーは、1892年、アメリカの荒野に貧農の娘として生まれ、全く野育ちで、飢えと寒さと貧困のなかから芽を出し、あたりの雑草をかきわけて大地に根を張ってゆく樹木のような女性であった。雨にも風にも、霜にも痛めつけられることなく、ぐんぐん伸びていったが、その反面には、ただひとりで大地をゆくような孤独感をいつもかかえこんでいた。大平原に立つ一本の樹のように、強く、厳しくあっても、さびしさをひとしお心にしみて感じていた。

このさびしさから、彼女の人なつっこさが生まれ、あたたかさがあふれでていた。がむしろで強気でありながら、こまやかな魂の持主だった。<sup>(2)</sup>

母のサラは、裸足のままで馬のように働き、石ころだらけの起伏するやせ地を耕した。父はいつも大金持になることばかりを夢みる遊び人であった。父親の血統にはチェロキー・インディアンが流れており、サラの父は、「インディアンと外人は決して信用できない」と結婚に反対していた。その生家は丘の上に立つ小さな丸太小屋で二部屋からなり、七人家

族にベッドは二つしかなかった。アグネスは、幼い頃、両親の性交を見てしまって驚愕し、母がおそろしい侮辱を受けいれていると思いこんで、母に対する尊敬の気持をすっかり失ってしまったことを自伝の中で語っている。

1904年、西へ行くことに夢をかける父のために、一家はコロラド州南東部の鉱山地区に移った。ここで少女時代を過ごしたスメドレーは、資本家と労働者という階級差別を知ることとなる。14歳になったアグネスは、学校が終わると他人の家に奉公に出るようになった。1908年の秋、小学校の教師となり、一人ニューメキシコ州レイトンへ移る。1910年、母が危篤となり戻ったが、母は貧困の中、42歳で亡くなった。18歳のアグネスは、16歳の妹、14歳と12歳の弟、死んだ姉の生みおとした赤ん坊の世話を全部、背負うことになったが、父の酒と暴力だけはコントロールできなかった。教育だけが、結婚を逃れ、両親のような生活を繰り返さないための唯一の道に思えたので、スメドレーは必死にそれにすがりつき、働きながら、アリゾナ州テンペの師範学校に通った。が、食べていくためには学校をやめなければならなくなり、教師などという仕事がつまらなく思えてきた時に、人生の転機が訪れるのである。

一方、パール・バックは、アメリカ南部のウェスト・ヴァージニア州ヒルスバローの、白く塗ったコロニアル・スタイルに広い庭のある家で、1892年6月26日、誕生した。両親のサイデンストリッカー夫妻はキリスト教の宣教師として中国の奥地で暮らしていたが、十年に一度与えられた休みに帰国したときにパールが生まれたのである。後に、『パール・バックのアメリカ』で述べているように、彼女の前半生40年間に中国で過ごされたとしても、まずはアメリカの大地に生まれおちたということは、生涯、アメリカという国に錨をおろしたようなものである。

生後四か月でパールは両親とともに中国へ入り、揚子江のほとりの鎮<sup>ジェンジャン</sup>江という町の牧師館で育った。中国人達に囲まれた生活で、パールが最初にしゃべり始めたのも中国語で、中国人の乳母もついていた。母はその時代の女性としてはまれな神学校出身で、教養豊かで才気煥発、明るく意志の強い女性であった。若い頃、神の道を説く父に出会い、理想に燃える彼にひかれて結婚し、家族の反対を押し切って遠い中国まで夫についてきた。そして23歳の時から41年間、中国に住みついたのである。昔の中国奥地のことで、病気の手当もままならず、わが子を四人まで熱帯病で失い、丈夫に育ったのはパールと兄と妹の三人だけだった。母は子供達に、アメリカ精神の真髓を繰り返し説いて聞かせた。荒野を切り開いていった開拓者達のたくましさ、イギリスの支配の鎖を断ち切った独立戦争、黒人奴隷を解放した南北戦争、そうした話を通して、自由と独立の大切さが子供達の心に植えつけられていった。母が「アメリカ人」を代表する存在であるとするならば、乳母のワンは「中国人」の心を示し

てくれた大切な人であった。文盲であったが中国のお伽話をたくさん語ってくれ、彼女のこまやかな温かい心にはぐくまれて、パールは中国人の魂にふれたのであった。母親が子供の一部となるようにワン乳母は彼女の中に生き続け、自分と中国人が同じ血を分けあっている兄弟のような親しみを抱くようになったのであった。

1900年、8歳のパールにとって、生まれて初めての恐怖の事件が起こる。帝国主義列強に対する中国人民の反抗は、1839～42年のアヘン戦争、1851～64年の太平天国の乱となって19世紀中頃から起きてきたが、太平天国の方は、清朝と外国資本が一緒になって鎮圧してしまった。それ以来、各所に、外国人宣教師やその他の外国人に対する民衆の反感が、焼き打ちや殺害となって表われた。中でも一番大きな事件が1898～1901年の義和団事変である。パールの一家は、母の機転によってかろうじて殺戮を免れたが、その時、山東、山西一帯で多くの外人宣教師が殺され、連合国の軍艦が出動し鎮圧した。パールは自分が外国人であるということを初めて思い知らされたのだった。こうしたことが起こる度に、諸外国は賠償を要求し、賠償を支払うために、清朝は苛酷な税金を民衆からとりたてた。

パールが上海にあるアメリカ人経営の女学校の寄宿舎にいた頃、西太后が死去し、宣統帝が倒れかかっている清朝のあとを継いだ。1910年、パールはアメリカ・ヴァージニア州ランドルフ＝メイコン女子大学に入学。その在学中の1912年、辛亥革命によって清朝が倒れ中華民国が成立した。外国の帝国主義に太刀打ちすることのできない封建勢力を倒して、ブルジョワジーが中心となった共和政体を作るはずであったが、ブルジョワジーの力が弱かったために、軍閥に政権を握られてしまった。袁世凱の軍閥政権は、かえって外国の圧力に妥協し譲歩した。1915年第一次世界大戦の最中に、ヨーロッパ諸国のすきに乗じて中国の植民地化をひとりじめしようとして日本がつきつけた21ヶ条の要求をのんで、中国の民衆に「国恥」の日をもたらしたのは袁世凱政権である。ちょうどこの頃、パールはアメリカの大学を卒業して中国に帰っていた。袁世凱の軍閥政治時代のことは、『息子たち』（1932）の背景となっている。

## ii) 結婚と離婚

娘にとって、母がどのような一生を送ったかということは、意識するにせよしないにせよ、深い影響を与えるものだ。アグネスは、母のようなみじめな死にざまはしたくないと考えて、貧困生活から脱け出すためには教育を受けることが鍵だと考えた。これはまた、母が、教育を大切なものとみなしており、子供達をできるだけよい学校にきちんと通わせたいと願ったこと、父にはできない計算などもできたこと、文盲だった父は契約書でだまされてただ働きをさせられたことなども影響していると思われる。また、働きに出された家々で見た結婚生

活は、女の服従そのものであり、自分の母のみならず、結婚という制度に疑念を抱いたこと、女の隷従の最たるものとして性交をひたすらおぞましいものと思いこんだことなどが、後の彼女の人生を大きく左右している。

バックの場合、母が繰り返し語ったアメリカ精神が、彼女の祖国に対する信頼と愛情のいしずえとなった。一方、夫の伝道の仕事に自分も携わりたいという母の願いは、「それは女のする仕事ではない。お前は子供を産み育て、家庭さえ守っていればいいのだ。」という父によってはねつけられた。その母の満たされなかった思いを埋め合わせるかのように、バックは自分の作家としての仕事を大切な生きがいとした。初めの夫が専制的で、彼女の仕事を好まなかったことが離婚の大きな原因となっている。

バックもスメドレーも、理想的な男女関係として、両者が全く対等で、精神的に強く結ばれ、互いを高めあう友情のようなものを考えている点で一致している。バックの作品『女の世界』（1946）におけるウー夫人は、慣習的な結婚をした中国上流の女性であるが、40歳の誕生日に、以後、夫との交渉を断ちたいと申し出て、主婦としての家事管理はもとどおりやるのだが、結婚後初めての読書と思索の生活に入る。彼女は外国人の神父、アンドレイを招いて講義を受け、未知の世界に目ざめていくのだが、いつしかアンドレイと学問以外の話もするようになり、これまで夫との間に体験しなかったような魂と魂のふれあいを感じる。ある日突然にアンドレイは匪賊によって殺され、その死骸に直面した彼女は、「私はこの人を愛していた」とつぶやく。その日から、彼女はアンドレイの養っていた孤児達を自分の大きな邸内にひきとって彼の仕事を引き継いでいき、アンドレイの生命が、自分の中で温かく生き続けることを感じとるという物語である。このように、互いの人間を豊かにしあうような心のつながりを、妻あるいは夫以外の男女に求める例は、バックの他の作品にもいくつか見られる。

スメドレーは、1912年20歳の春、アリゾナのテンペ師範学校に通いつつ、ゆきづまりを感じていた時、ソーバークとアーネストというブルンディン姉弟と知りあった。二人は教養があって上品で洗練されており、アグネスが理想とするような友愛関係で結ばれていた。当時のアグネスが少しでも近づきたいと憧れて努力していた世界を体現しているような姉弟であった。また二人は熱心な社会主義者であり、彼らから受けた政治・社会観への、または情緒的な影響は、はかり知れないものであった。その頃抱いた疑問を、『女一人大地に行く』の中で次のように回想している。

二人の間の愛情、友情、理解は非常に深く美しかった……愛とは本当に美しく自由なものかしら……人間は優しくしかも強くなれるのかしら？ 女に危険と服従を伴わない愛があり得るのだろうか？<sup>(3)</sup>

1912年8月24日、24歳になるアーネスト・ブルンディンと20歳のスメドレーは結婚届けを出した。アーネストも同意したことであるが、アグネスは、自分自身と妹、それに二人の弟を学校に行かす金が出るまで子供は作らないと宣言し、夫婦間に肉体関係は暫く持たれなかった。アグネスは姉のソーバークとその婚約者と同じく同居し、アーネストは仕事の都合で離れた所にいた。やがてアグネスがアーネストのもとへ移ると、夫婦生活が持たれ、アグネスは妊娠した。そうとわかった時、彼女は恐怖にすくみ呆然とした。夫との平等な関係はたちまちにして吹飛び、子供が生まれれば学校にも行けなくなり、夫と知的に同等でいることは不可能になってしまう……。彼女は薬屋に走り、子供を堕ろそうと毒薬を求めたのであった。

アーネストの経済的援助により、1913年6月、スメドレーはサンディエゴ師範学校に入った。学内新聞の創刊に関わり、演劇でも活躍し、1914年6月には、この学校で教職も得た。その年の11月には、同じ学校で学ぶ妹も招きよせている。1915年6月、アグネスと妹はバークレーに行き、アーネストと一緒に暮らした。そして再び妊娠、絶望、堕胎が繰り返される。アグネスの友達であろうと努めたアーネストだが、やはり普通の家庭、子供が欲しかった。1916年、アグネスは政治活動家として忙しくなり、社会党の正式黨員となる。産児制限運動の創始者マーガレット・サンガーも黨員であった。夫を追ってフレズノへ行き、商業新聞に初めて職を得て、インド独立運動を知る。が、結婚はまた危機を迎え、アーネストは遂に離婚の手続きにふみ切った。12月、社会黨員であることがサンディエゴ師範学校の校長に知れて解雇され、翌年、教職に就く妹のために町を去るよう勧告されたスメドレーは、ニューヨークへと旅だっていく。

秘書の仕事をしてながら、ニューヨーク州立大学で学んでいたスメドレーは、インドの民族主義者と深くかかわるようになっていく。1918年3月、インド独立運動を助けたことから投獄され、12月まで監獄生活を送ったが、このとき知りあった女性達を描いたエッセー『監獄の友だち』が認められて、1919年には社会党の新聞『コール』紙に婦人記者として職を得た。マーガレット・サンガーの秘書の仕事もし、中心メンバーの一人となって“インドの自由の友”という組織も作った。

1920年12月、大きな社会変革が起こりそうなベルリンに行き、この後8年間、ヨーロッパで暮らす。すぐに、インド独立運動のリーダー、ヴィレンドラナト・チャトパダーヤと同棲し、アグネスは献身的に尽くした。子供を作らずにインド独立のために徹底的に闘うという点では二人一致していたが、インド人の封建的な考えのもとで、遂にアグネスは精神的肉体的危機に陥り、1923年頃から精神分析医なしではやっていけないようになる。精神分析の延長線上で、自伝を書くということになり、1925年、デンマークのトゥールエという島で *Daughter of Earth* が執筆された。1926年には、念願のベルリン大学に入学したが、勉強に挫

折。1928年12月、『フランクフルター・ツァイトゥング』紙の特派員として、中国入りしたのであった。この年より12年間、中国にあって、革命のいぶきを報道することになるのである。

パール・バックは、25歳になる1917年、中国の農村経済学の権威、ロシング・バック博士と結婚した。華北の小都市で夫とともに5年間暮らす間に、後に『大地』に記すような農村の生活を知り、革命の進展ぶりを感じとるのであった。中国のインテリは、辛亥革命が失敗したことの認識から、出直した。封建制と軍閥政治と外国の帝国主義への妥協と隷属が、自分達自身の中にある家族制度の倫理、権威に対する隷従につながっているということを認め、内面から突き破る努力をしようとしたのが文学革命である。こうした革命の内面化の過程を経て、1919年、21ヶ条の廃棄を要求する五・四運動が起きてきた。これをきっかけとして中国の革命は、労働者を中心とし、中小商工業者、農民、進歩的インテリを結集する封建制反対の階級的な闘いと、外国の帝国主義に反対する民族的な闘いとが結びついたのである。

1921年春に長女が生まれた。バックは小さい時からとても赤ん坊が好きであり、美しく利口そうな娘を誇らしく思っていた。ところが、娘が3歳になった頃から、口がきけないことや不思議な挙動をするので、バックは不安な気持ちにかられ始めた。1925年、親子三人アメリカに行き、娘の治療のため一年間滞在することとなった。パールは娘を連れてアメリカ中の病院を駆けめぐり、最後に真実を告げられたのである。その決定的な宣告は、『母よ嘆くなかれ』（1950, *The Child Who Never Grew*）に次のように書かれている。

「……お子さんは決して正常にはなりません。ご自身を欺くことはやめなさい。貴女が望みを捨てて真理を受け入れなければ、貴女は生命<sup>いのち</sup>をすりへらし、家族は乞食になるばかりです。……このお子さんは貴女の全生涯を通じて、貴女の重荷になるでしょう。その負担に耐える準備をなさい。……中でも、このお子さんが貴女のすべてを吸収してしまうようなことをさせてはなりません。お子さんが幸福に暮せるところをお探しなさい。そして其処にお子さんを置いて、貴女はご自分の生活をなさい。」<sup>(4)</sup>

パールにとって初めての底なしの絶望感であった。とにかく悲しみから逃避するために、頭脳を働かせる何かに打ちこんでみることにして英文学の勉強にとりかかり、1926年には修士号を取得した。

その年南京に帰った時、中国は混乱のさなかにあった。1921年、中国共産党が結成された頃、外国の帝国主義に反対する労働者のストライキが各所で頻発していた。24年には孫文が正式に国民党の総理となり、共産党と提携して中国の革命を推し進めることを決定し、国共合作時代が出現したが、孫文は北伐の途上北京で死んだ。孫文のあとを継いで国民党の総司令となった蒋介石は、1926年第三次北伐を宣言し、27年3月には、南京・上海を占領し、多

くの外国人が殺された。それを口実として、英米の軍艦は南京を砲撃した。この日はバックにとって生涯忘れることのできない恐怖の日となり、自分の中の「中国人」と「アメリカ人」との溝をまざまざと思い知らされることとなった。バック一家は、彼女が以前、母子ともに命を救ってやった中国婦人の助けにより、殺されずにすんだのであるが、このような個人的善行を重ねても、いざとなれば、金髪と碧眼によって「侵略者」である白人の仲間に入れられてしまい、中国人との真の連帯は築けなかったことを認識せざるを得なかったのである。

1929年アメリカに向かい、あちこち見て回ったあげく、子供達が一番幸福そうにしている施設に子供を託し、自分は南京へ戻った。知恵遅れの娘をめぐる胸のはりさけるような苦しみ、そして南京事件の衝撃、この二つの根源的な体験は、バックを創作活動へと駆り立て、その結晶として『大地』が生み出されたのである。自信のないままジョン・デイ社に送られた原稿は、1931年出版されてベストセラーとなり、この年の最優秀の小説としてピューリッツァ賞を受けることとなった。

1931年の満州事変以後、日本軍の侵略の戦火が広がる一方であった。中国語を母国語のように話し、中国の人々を同胞とさえ感じるバックは、1934年、この国に辛い別れを告げアメリカに永住する決心をする。帰国を機会にバック博士との不幸な結婚生活に終止符を打ち、翌年、ジョン・デイ社の社長リチャード・ウォルシュと再婚する。

二度目の結婚は、実に満ちたりたものであった。夫は彼女の自立する精神を尊重してくれ、創作にうちこんでいる間はふみこんでこない。そして原稿が出来上がると、丁寧にチェックをして意見を述べてくれるのである。バックは編集者として偉大であり聡明な伴侶を限りなく尊敬していた。が、夫の嫉妬心、彼女が作品のことを考えこんでいる時などに淋しそうな顔をする男の独占欲を知っていた。

アーネスト・ブルンディンと離婚して以降、一度も結婚せず、結婚という社会制度に反対していたスメドレーに対して、バックは、男性と女性の交流の場として最も根源的なものは結婚だと考えている。それが愛情と理解に基づくものであろうとなかろうといずれにしても、結婚によって男性も女性も生命の根源につながり、生活に根を下ろすことが可能になるからである。しかし、どんなに完全な結婚であっても、女性の愛情の本質は母性であり、男性の愛情は、相手の精神と肉体のすべてを自分のものにしたいという欲求を持っているため、食い違いが残る。それにそれぞれの人間が違った個性を持っているのだから、完全な一致はありえない。そこでバックは、恋愛、結婚以外にも男女の出会いには様々な形をとることができるのであり、先に述べた『女の世界』のウー夫人とアンドレイのように、互いを豊かにしあう男女関係を描いているのであろう。このような心のつながりを持ち合う男女は、もし互い



に恋愛し結婚するとしたら、自由な交流と互いの独立は失われてしまうだろうことを常に自覚し、警戒している。

1929年から7年間、上海をベースとしたスメドレーは、後にソビエト・スパイとして処刑されるリヒャルト・ゾルゲと1930年に知り合い、親密になるのだが、その時の様子を友人への手紙で次のように記している。

「私は結婚している、というか、そうしているも同然です。彼は、いかにも男らしい男で、すべてフィフティー・フィフティーの関係で、互いに助けあい、一緒に仕事をし、飲んで騒いだりしています。大きな、遠慮のない、すべての面にわたる友人関係、同志関係なのです。どれぐらいこの関係が続くかわからないけれど、それは私達によるのではないのよ。あまり長くないのでは、と思うの。でも今が私の人生では最高の時期だし、こんなに素晴らしい日々は初めてなのよ。頭も体も心も、こんなに健康的だったことはありません。」<sup>(5)</sup>

スメドレーは、性に対して抑圧された考え方を持っていたことの反動として、一時は、「男なりに性生活を追求する」と豪語していた時期もあった。ゾルゲ以外にも、何人もの恋人を持った。が、年をとるとともにそれも落ち着いてくる。また精神分析によって、母よりも父を愛していた、ということがわかるのであるが、インドの独立運動の指導者ラジパット・ライや中国の魯迅に対しては、父親を慕うような全き信頼、尊敬、愛情を寄せて献身するようなところがあった。

バックとスメドレー自身は知らなかったようであるが、男性関係ということで、ある共通点をマッキンノン教授が指摘している。それは二人とも、異なる時期にはあるが、中国のロマンティックな詩人、徐志摩と恋愛関係にあったということだ。スメドレーが最初につき合った中国人は、西欧で教育を受けたインテリ達で、最も心ひかれた徐志摩は、まさに東と西の文化が完全に融合したような人物であった。背が高く細身で、中国の学者風のガウンを身にまとい、詩人らしい繊細さを漂わせ、英語、中国語を同じように巧みに操ることができた。1929年の夏、彼とスメドレーは恋人同士となり、揚子江をさかのぼって徐家の田舎の邸宅へ向かう二週間の船旅で最高潮に達した。が、間もなくスメドレーは恋から醒め、「貴族的な中国人の友達と、自分達を乗せて町中を走り回る人力車夫とを比べて、父の背中を思い出し、自分は裏切り者になり下がっていたと反省する。悲劇的にも徐志摩は、1931年、飛行機事故で亡くなった。

### iii) 作家としての仕事

幸福な再婚をしたパールであったが、彼女には次のような発言がある。「もし万一、『お前

は、結婚と芸術と、どちらかひとつを選べ』と至上命令が出たら、私は夫と子供を捨てても惜しくはありません。』<sup>(6)</sup>そして、「私は、私がいささか特殊な人間に生まれついているということを白状しなければなりません。というのは、私が小説を書かないでは幸福になれないというのは、本音なんです。』<sup>(7)</sup>とも言う。先にも書いた通り、母が父に拒まれて自分のしたい仕事をできずに主婦と母としての役割だけで我慢したのを埋め合わせるかのように、パールは、書く仕事を生きがいとすることに誇りを持っているように思われる。だが、作家としての出発は早くはない。評論を書き始めたのが30歳の頃で、本格的に小説を書いて出版できるようになったのが38歳の年である。書かずにはいられなかった衝動としては、1927年の南京事件の時に体験した、白人であり抑圧者の側にいる自分と皮膚の色の違う被抑圧者である中国人との「裂け目」の自覚と、白痴の娘に対する絶望が、内と外から突き上げてきたのであろう。彼女は、創作という行為を通して、この二つの痛い体験を、互いが他の体験の意味を深めあうものとして、理解し、結晶させていく道を選んだのだ。そして、施設に子供を託して帰ってきた後、猛然と執筆活動に入った時には、自分の労働によって、子供を生涯支えていかねばならないという経済的逼迫もあったのだ。

つまり、作家としての彼女の根幹には、彼女の本質に根ざす「母性」と「人種間の溝」の意識がある。そこに共通して流れているものは、白痴の子でも有色人種でも、すべての人間が同等に持っている価値の認識であり、子供が幸福になれるような条件を、社会全体の中に作り出していくのでなければ、自分の子供一人でさえも幸福にすることはできないという考え方である。彼女は、個人的本能的な母性を絶望を通して否定し、社会的知性的な母性に昇華させることによって絶望を乗り越えた。彼女の戦争に対する憎しみと平和への意欲も、この社会的な母性に根ざしているのである。

『大地』(1931)『息子たち』(1932)『分裂せる家』(1935)の三部作は、ワン家の三代記を通して、辛亥革命——軍閥政権——五・四運動——国民党政権樹立までの、革命の地鳴りの時期を扱っている。『大地』において、ワンルンとオーラン夫婦の物語は、中国の広い大地を流れる大河のように、運命の波間に揺れ動きながら浮き沈みの人生を織りなしていく。人間は大地から生まれ出て、その恵みにはぐくまれ、そして最後には再びその土地に帰っていく。こうした農民の本能的な土との結びつきは、新婚当時のバックが夫とともに見て回った農村でつかみとったものであった。彼女はそこに、人間のとだえることのない生命の流れを感じたのである。

ワンルンは次々と成功し大地主になっていくが、ただ一つ気がかりなのは、飢饉の年に生まれた女の子が、三歳を過ぎているのに口がきけないことであった。オーランに先だたれ、年老いたワンルンは、自分が死んだら誰一人この子の面倒をみってくれる者がいないので、自

分の死期が近づいたら毒薬を飲ませて一緒にあの世に行こうと、薬を買って持っていたほどであった。それが、孫のような年の女奴隷、梨花が気だてが優しく、この知恵遅れの娘の面倒をみることを約束してくれるので、ワンルンは胸をなでおろし、いっそう梨花をいとおしく思うというくだりがある。ここにはまさにバックの万感の思いがこめられているであろう。

ワンルンの三男、ワンホウは心の底ですっと梨花を愛し続けていた。彼は「革命軍」に身を投じたつもりであったが、彼が「革命」と考えていたものは、結局は軍閥政治でしかなかった。個人としては善意でありながら、軍閥政治の仕組の中で、結局は反革命の役割しか果たすことができないのである。

ワンホウの息子のユアンは、革命軍に共鳴し参加したいと思ったが、軍閥である父を敵にまわして戦うことにためらっている。遂に革命党に加入したユアンは、捕えられ死刑の宣告を受けるが、突然釈放されアメリカ留学に送り出される。ユアンが帰国すると、既に国民党の中央政権が成立している。彼は農民の教育のために働くが、かつて革命党に加入することを勧めた友人は、国民党政権に早くも失望し、「本当の革命のため」に働くと言って中共地区に去る。

バックの中国を主題とした小説群は、辛亥革命前後の農民の生活から始まって、中華人民共和国が成立する前年の1948年の中国で終わっている。解放区の農村を扱ったこともない。バックは何も現在の中国の人民政府に反対しているのではないが、彼女がかつて半生を過ごし、肌身にしみついている中国は描けるが、新しい中国は自分のものとして感じるができないままに書けないのであろう。そしてまた、帝国主義列強に抵抗しつつ革命を行なっていった中国の大衆の姿を描くことで、中国の支配者、圧迫者であったアメリカの、自己批判を促そうとしていたのではなかろうか。

だが1937年、日本軍が中国侵略の大規模な行動に出たことで、闘う中国人に対する同情と賞讃は、抗日にたちあがった中国人を支持するという方向へいく。1938年に出たエドガー・スノーの『中国の赤い星』も、封鎖された中国共産党地区入りをした彼の名著で、戦う紅軍の実態を知らせるのに貢献した。

バックの『大地』では知り得なかった新しい中国人の息吹、紅軍兵士の心を開いて見せた最初のアメリカ人はアグネス・スメドレーである。1934年に出版された『中国紅軍は前進する』(China's Red Army Marches)は、1928年から満州事変の頃にかけての、中国解放の基礎を築いた紅軍の組織的な活動を物語風に生き生きと伝えている。共匪とよばれた紅軍が、装備の整った蒋介石の国民党軍に鋤や鋤で手向かいながら革命の流れをふくらませていく姿は、読む者に感動を与えずにはおかない。

日中戦争初期の時代には、華北戦線で日本軍の銃火を浴びながら、スメドレーは『中国は

抵抗する』(*China Fights Back*)を書き綴っていた。以下は、マッキンノンによるスメドレー伝からの引用である。

(1937年)10月初めには、スメドレーの背中もよくなってきて、彼女はムズムズしだした。戦場の八路軍から行軍をともにしないかと招待されると、すぐに応じた。……

『中国は抵抗する』は鮮烈で簡潔な力強さをたたえ、今なお、スメドレーの勇氣と細やかな感受性を伝えている。いつもながら情熱的な彼女は、本の主題と一体化する自分に素直で、大胆にもルポルタージュの中に自身の情感を投入している。

今夜、腹ぺこの男達が歌いながら、泥の床にひろげたワラかモロコシ茎の寝床に帰っていくとき、その歌声は、前にもまして私の胸に深くつきささってくる。彼らの声は、闇夜の力強いオーケストラのようにひびく。今日の食物にありつく私には、本当の心はつかみとれないのだ。こうした労働者や農民が心底から中国の自由を求めて闘う深い思いを完全に分け合うことはできないのだと考えてしまう。私ときたら、ただの傍観者で、私の立場はしっかり守られている。みんなが飢えても、私には食物があり、彼らが凍えても、私には着るものと温かいベッドがある。無数の者が凍てつく戦場で死んでいくのに、私は傍観者であり続けるのだ。私は通りの暗闇に消えていく彼らを見守る。まだ歌っている。そして私は、命を賭けて偉大な闘いに挑む彼らの心の中に入りこんで、その信念を照らし出す靈感のひらめきを待ちこがれているのだ。<sup>(8)</sup>

自分は傍観者にすぎないのではないか、とこのように何度も何度もアグネスは自己を厳しく責めたてている。中国人の魂に溶けこもうとした彼女は、彼らの苦難の底知れない深さを知れば知るほど、その苦難に立ち向かう意志の強さに打たれて、自己の至らなさを恥じる思いに悩まされたのであろう。ほろを着た八路軍とともにあらゆる困難を分け合いながら、彼女は生きることの喜びを知り、中国の大地で彼らから深い感動を受けて、己れを鞭打った。これが彼女の生きる根本的な姿勢であった。

1938年11月から1940年4月まで、スメドレーは、戦時特派員ならびに医療従事者として、最も危険な地帯である中国中央部のコミュニスト指揮下と国民党指揮下のレジスタンス部隊を回っていた。それには、中国奥地の負傷兵の医療の必要を諸外国に訴えるスポークスマンとしての重大な役目が含まれていた。周恩来は全面的に彼女を信頼し推薦したので、新四軍の指揮官は、戦場全部を自由に旅行する許可をスメドレーに与えたのだった。彼女の旅は、エドガー・スノーとジャック・ベルデンを含めて、男女のどの外国人特派員が中国の戦争地帯で行なった旅よりも長いものとなった。それは血わき肉躍る経験であり、ジャーナリストとしての彼女の経歴における、おそらくクライマックスであった。しかしその代償として、環境は厳しく危険なものであって、彼女はじわじわと健康を冒されていった。

『中国の歌ごえ』（1943）は彼女のこの一年半の経験のルポルタージュであり、戦争と革命というテーマをのびやかでドラマチックな筆使いで描き、戦闘や日本軍の残虐行為、そして中国側の英雄的行動を次々と色彩豊かにスケッチした。日本の侵略に抗する中国人民全体の戦いにアメリカ人の同情を喚起しようとして、意図的に、 коммуニストと国民党が一丸となって闘っていることを強調した。歴史書としてこの本を見た時に評価すべき点は、戦争によってもたらされた中国農村における社会的変化の記述である。農民の女達がどのようにして、軍と社会の生活の中で積極的役割を演ずるように組織され、大衆教育運動の中でどのようにして読み書き能力が向上し、民主的慣行が村の政治にどのようにして導入されたかが描かれているのである。

本の調子は明るさと元気が溢れているが、そこには書かれていず、彼女の1939年の私信からわかることは、しばしば感じていた孤独感や、 коммуニストと国民党が厳しい敵同士であり続けたこと、新四軍内でも共産党の指揮権が分裂していた深刻さであった。

しかし新四軍は日本軍の攻撃目標となる位の強い抵抗部隊となったのだが、その回復力の主たる源泉は医療部隊にあり、これに貢献した彼女の仕事ぶりは、今の中共政府も公式に認めているほどである。中国人の看護婦達は大都市出身者が多く、田舎の生活になじまず、日本の爆撃を恐れておろおろするばかりであったのに比して、スメドレーは逞しく、爆撃の最中にも生命の危険を顧みず、負傷兵を助けたことを、中国人医師が回想している。

スメドレーは子供の頃から綴り方が得意であり、師範学校時代も校内新聞の編集に熱心に携わった。1916年、初めて商業新聞に職を得て以来、ジャーナリストの道を歩き始めた。ベルリンでチャトパダーヤとの結婚がゆきづまった時、アメリカへ戻ってインド料理店でも開いたら、とソーバークに勧められたことに対して怒り、自分はいくら飢えても書く仕事をすののだといきまいた。気分の浮き沈みが激しかった彼女は、調子よく書ける時と全く書けない時があり、自分の書く能力にも、自信を持ったりなくしたりしているようだ。バックが、「朝の9時から昼の1時まで、毎日4時間コンスタントに机に向かって書き、あとの時間は家族のために過ごす」と語ったのとは対照的である。そしてバックには、評論よりも小説の方が大きな部分を占めていたが、スメドレーはノンフィクションのドキュメンタリー・ライターであり、現地に行ってインタビューをし、その空気を自ら感じつつ書くこと、自分が共感する人々の運動を支援するために報道することが重要であった。1920年代の精神分析は、彼女の怒りを創造的怒りへと転化させるのに役立ち、『女一人大地を行く』という自伝小説の執筆によって培われた筆の力は、中国の貧しい民衆の革命への目ざめを生き生きと描写するのに駆使されることとなった。十年余り、インドの虐げられた人々のことを書いてきたが、それは間接的な情報によるものであった。が今や、中国の戦う人々を描くのに、自分の直

接の見聞が生かされるのだ。彼女の演説も往々にしてそうだったのだが、自分の貧しい生いたちから説きおこし、なぜ自分が中国の困窮する人々に共感するかを読者に納得させてから、中国人民の正義の戦いぶりを賞讃して描く、というように、自伝を織りまぜた書き方も、アグネスならではのものであった。

ゲリラの前線基地を回っていたスメドレーのアピールは効を奏し、イギリスや赤十字からの医療援助が中国の奥地へも届き、彼女は英雄であった。が、彼女の健康はいよいよ衰え、1940年8月、治療のため香港へ入った。1941年1月、1937年に国共一体となって以来初の衝突が、新四軍と国民党の間で起こった。そしてこれ以降、国共が提携することはなくなってしまったのである。スメドレーは中国の内地へ戻ることを諦めて、『中国の歌ごえ』をまとめ、アメリカの世論により強く訴えるために、1941年帰米したのであった。

#### iv) スメドレーとバックの出会い

1942年にニューヨークへ出て来たスメドレーは、バックとその夫リチャード・ウォルシュから援助を受けることとなる。金に困っていたスメドレーは、バックのアレンジしてくれた講演の契約をすぐに受けた。スメドレーはかねがね、バックのエネルギーと勇氣に感心していたのだが、とりわけ、1932年にバックがニューヨークで行なった「外国の伝道は必要か？」という講演に感銘を受けていた。これは中国在住の宣教師に見られる人種偏見を批判したもので、これをきっかけにバックは宣教師の地位を辞することになったのであった。

バック、ウォルシュ、スメドレーの三人は、イギリスの対インド政策に関しても意見が一致していた。1943年11月、インドの独立を支持し、英国官憲がネールを釈放するよう訴えた記事をウォルシュとともに出したスメドレーは、その中でネールをトマス・ジェファソンと比べ、現代の最も偉大な政治家で民主主義者であるとほめたたえている。

アメリカの対蒋介石援助を非難するということでも、スメドレーとバックは一致していた。1943年、ニューヨークやワシントンで冷戦の気配が現われ始め、第二次世界大戦が終わりに近づくにつれて、ソ連が新たな敵と見え始め、中国の共μμニストはその傀儡とみなされるようになってきた。共μμニズムの拡大を防ぐために蒋介石を支持しなければいけないというのが、かつてはスメドレーの古い友人であったJ. B. パウエルやウォルター・ジャッドらの意見であった。スメドレーは、蔣政権の下、そして中国共産党の下で暮らしてみても、中国の貧しい人々にとっては、蔣より共産党の方がよりよいことを確信していたのである。

1943年9月、『中国の歌ごえ』がニューヨークの書店に並ぶと、右派から左派に至るまで全国の各紙がこぞって賞讃した。が、思わぬところから批判が出た。それは、1930年代初めにスメドレーが上海で知り合いだったグレース・クックによるもので、当時の彼女は、

ジャーナリストとしての仕事と子育てをいかに両立させるかで苦しんでいた。彼女は、スメドレーがこの本の中で「単なる主婦」を軽蔑したことに深く傷ついたことを述べ、母性を拒否する「社会的意識」など何の価値があるのか、と問いかけた。それに応えてスメドレーは、様々な法を伴う男性社会の産物である結婚という制度と、普遍的な自然現象である母性とは区別しなくてはならないと説いた後、次のように述べている。

子供達——すべての子供達——は社会によって誰でも保護されなければならないのです。……

自分だけの面倒をみるのでは充分ではない。自分の民族のみでも充分でない。私達の社会的自覚とは世界全体を抱きこんで、人類全体のためによい社会を作らなければならないのです。私達と同じような考え方をする人はどこにでもいるはずですよ。なぜなら、今は特権者として振るまうアングロ・サクソン民族だって、神の選民ではないのですから。

グレース、あなたは皮肉っぽく、妻であれば子供達を放ったらかして、私のように八路軍に走るなど出来ないと言う。……でもそこでは結婚した女性が大勢いました。戦場で数えきれぬほど出会った彼女達は、母としての義務を果たしながら、女の性を縛っている鎖を断ち切ろうと懸命でした。……

いつかは時が来て、未来の世代では、母性を守り、尊重すべき仕事だとみなすようになるでしょう。しかし、その仕事は、市民として生きる人間の単なる一部分にすぎないのです。<sup>(9)</sup>

スメドレーは、自分自身は子供を産むことを拒否したが、子供を愛する気持、母性的な側面はたっぷり持っていた。自分の通訳を務めてくれた若い周立波<sup>しゅうりつは</sup>に対しても、母性的な思いやり、心配を寄せていて、彼からは「おばあちゃん」と呼ばれて慕われていた。『中国の歌ごえ』の中の一章、「私の中国人の息子」では、彼女が養子に欲しがった「小鬼」（ゲリラ部隊のために働く孤児）を可愛いがる様子が女性らしく描かれている。また、敵対する日本人であっても負傷兵を介抱してやり、「お母さん」と呼ばれたこともあった。そして、妹、弟達の面倒をみることに心を砕いた様子は、はじめに述べた通りである。このグレース・クックに対する返答文を読むと、パール・バックと同様に、子供に対する愛情が、社会的・知的な児童観に高められていることがわかる。そして、母親であっても、社会の一市民として自覚を持って子育てをすべきであることを訴えたのである。

#### v) マッカーシズムの嵐の中で

冷戦の空気が強まるとともに、“赤狩り”が激しくなり、スメドレーは追放されるべき

“魔女”の一人とされていく。生涯、反体制を貫き、抑圧された人々とともに運動をしてきた彼女は、インド独立運動に加担したかどで26歳の時、監獄に入り、以後、ベルリンでも上海でも英国官憲に追い回されていた。そして帰米した1940年代からはFBIの調査員につけ回されていたが、1949年2月に、アメリカ陸軍省が「ゾルゲ・スパイ事件の真相」を公表すると、スメドレーにもスパイの嫌疑がかけられ圧迫が激しくなった。実際、スメドレーは一度たりとも共産党員であったことはなく、ソビエトとつながりがあったという証拠も一つもない。マッキンノン教授の伝記も、彼女の汚名をそそぎたいという熱意が感じられる。彼女は中国共産党には入党願いを出したが、拒否されていたく傷ついていた。ソビエトのスターリニズムには疑問を持ち、女性を起用しない体制を批判している。中国の共産主義者は農地改革者であって、ソビエトの傀儡などでは決してないことを強調し、戦後はユーゴスラビアの共産主義に共鳴している。しかし、蒋介石が共産軍に敗北したことにより、「アカ」を恐れる人々のアグネスへの非難が、一層強まっていった。そして、自分を支援してくれる一握りの友人達にも大変な圧力がかかるようになっていた。経済的にも逼迫したスメドレーは、物価がより安いヨーロッパでまず暮らして朱徳将軍の伝記を仕上げ、そこから中国へ行く道を考えることにしてイギリスへと旅立ち、1949年暮れ、香港で知り合いだった友人の家に寄寓することになった。

1950年3月、残る力をふりしぼってスメドレーは、最後となる二つの論文を書いた。どちらも、中国本土の海岸沿いの都市を一段と激しく空襲する米軍を手きびしく批判したもので、それらの米軍機は蒋介石の亡命した台湾を基地としていた。朝鮮の高まる緊張や中国沿岸の爆撃は、東京のマッカーサー将軍を手先とするアメリカの主導で、ソ連を正面对決へと引き出すための作戦であると論じた。

3月には、胃潰瘍が出血して急激に衰え、精神的にもひどい鬱になって、寄宿先の友人とも喧嘩ばかりするようになった。そこで4月、もう一人の友人のもとへ移り、そこで入院することとなった。5月5日に胃の手術が行なわれ、一時は成功と思われたが、翌日、息をひきとったのであった。彼女の灰は中国に運ばれ、翌年5月、北京での長い追悼集会の後、「革命戦士の墓」に納められた。

バックの方も、1950年11月に国連で中共代表・伍修羅が、アメリカ政府の台湾における軍事的占領を非難した演説を行い、それを支持したために非米活動調査委員会のブラックリストに載せられた。が、1931年にピューリッツァ賞を、1938年にはノーベル文学賞を受賞している超著名人であり、スメドレーのようにラディカルな嫌疑がかかるわけでもなく、着々と彼女の活動を展開していた。

1949年バックは、アメリカ兵とアジア女性との間に生まれた混血児のために、収容施設



ウェルカム・ハウスを創設した。これはやがて、孤児達の養子縁組の推進機関にも発展し、バック自身も九人の子供達を自分の養子としてひきとった。1950年には、知恵おくれの娘を通しての彼女の精神史の克明な記録である *The Child Who Never Grew* を発表。同じ悩みを持つ親達を勇気づける思いと、すべての子供に同じように人権を認めてほしいという願いがこめられている。1954年の *My Several Worlds*, 1961年の *A Bridge for Passing*, 1966年の *For Spacious Skies* などは、自己の中にある中国とアメリカという二つの世界を、統一的な視点でとらえ直そうとする自伝的作品である。1964年には、ウェルカム・ハウスを通じて新しい養父母のもとへひきとられていく一人の子供の生活観察記である *Welcome Child* を発表。さらにバックは、1964年、膨大な私財をなげうって、「パール・バック財団」を設立し、日本・韓国をはじめとするアジア各国の不幸な混血児の福祉・教育のための支援活動にもものりだし、小説家であると同時に、本格的な人道主義的社会運動家としても精力的な活動を続けた。この財団は現在も、フィリピンなどアジア各国で立派に機能している。

彼女は80年の生涯をちょうど半分ずつ、中国とアメリカで送ったが、中国育ちの「よそ者」としての目をいかしてアメリカをみつめて書いた、後半40年の総決算が1971年出版の *Pearl Buck's America* である。そして1973年3月、ヴァーモント州の自宅で、静かにその生涯を閉じたのであった。

### 3 むすび

#### i) 人種間の溝の意識

英語を覚えるより先に中国語を覚え、中国人と同じ小学校に通っていたパールには、自分だけが皮膚の色が違うという意識など全くなかった。それが、8歳の時に起きた義和団事件によって、白人であるが故の恐怖の体験を初めてしたのであった。1951年に出された *God's Men* は、義和団事件から始まるのだが、そこではバックはこの事件を、西太后とならずものとの外国人に対する共同陰謀としてとらえ、外国の圧迫に対する民衆の自然発生的な反抗であるという意味を認めていない。

1927年の南京事件についても、1949年出版の *American Argument* において、少数民族の代表であるエズランダ・ロウブソンとの対話の中でこの事件にふれた時、「秩序を回復しにやってきた、イギリス、日本、アメリカの軍艦のおかげで命拾いした」と述べてしまい、ロウブソンに、「あなたは“秩序回復”というが、それは中国に対する内政干渉である」と批判されている。

バックは好んで中国の農民を描いた。大地に根をはって何物にもへこまされない生活力とその叡知を称えていると思う。そして『大地』にあるように、「貧乏人があまり貧乏になり

すぎ、金持があまり金持になりすぎると、貧乏人はどうすればいいかを知っている」という、虐げられた者の自由への意志と圧制者に対する抵抗力も中国人の中に見出し、彼らの力の根源とみなしている。が、ワンルンもオーランも、本能的にこのような民衆の動きを察知して自分達も何とかうまく立ち回ろうとするのみで、政治的には全く無理解で、本当の民衆の改革の力の一部にはなっていない。『大地』において、資本家を非難する青年がビラを配るが、字の読めないワンルン夫妻は、その紙をただ靴底にするだけである。それに対して、彼らの抵抗のエネルギーを組織化して社会改革の役目を果たしていくべきインテリもバックの作品には描かれるのだが、その「真実な」インテリも、愛すべき善意を持っているにもかかわらず、究極のところは自分達の特権からぬけきれず、そこに寄生する中途半端な存在なのである。

バックが作家となり、創作を通してその意味を解きあかしたいと思ったことは、特権者、支配者としてのアメリカの白人である自分と、特権を持たない被支配者であった中国人との間に厳然として横たわる溝の意識であったのだが、バック自身、結局のところ、自分の特権をすべて捨てて、虐げられた大衆の完全な一人となって特権者に対して戦うということはしなかった。あくまでも特権者の立場にふみとどまったのだが、社会的弱者と連帯したいと願う気持は真摯なものであり、中国の庶民とアメリカの庶民を自己の中において統合することによって人種の壁を乗り越え、支配者・抑圧者としてのアメリカを内側から突き崩すテコになろうとしたのである。

生まれながらにして中国人の間にあったバックと異なりスメドレーの方は、自ら選びとって、インド人と共に民族独立のために奔走して投獄もされ、中国人民とも命がけで共に闘った。バックが中国を去った1934年以降、ますます激しくなる日本軍の空襲にもめげず、スメドレーは中国人の前線基地を巡り、医療部隊のために自ら働き、スポークスマンとしても効果を上げた。貧困と無知の世界に生まれ育った彼女は、世界中のそのような境遇にある人々と結びつくことができたのだ。彼女と妹、マートゥルは必死で教育を積んだ結果、妹の方は自分の育った過去の世界には背を向けて、中流社会に入りこもうとした。が、スメドレーは、自分の手で身につけた教育を、貧しい虐げられた人々のために捧げる人生を選んだのである。そこには中流社会に対する彼女のコンプレックスもあるようで、西部の田舎育ちの彼女には、ニューヨークやヨーロッパの洗練されたインテリ達よりも、インド人や中国人の庶民という方が却って同胞意識と安らぎを得られるようなところもあったと思われる。そのような連帯意識を持っていた彼女でさえも、裸足で戦う中国人に比べて、自分だけは温かい毛布と衣類、食糧、寝床も与えられているのだという特権的立場に対するひけめ、そして、欧米人のジャーナリスト仲間といるとやはりすべてがわかりあえるのに、中国人の心の奥底、微かな

ニュアンスは計り知れないという孤立感は、とうとうぬぐいきることができなかった。が、彼女は、自分の信ずる運動にとことん尽くし、稼いだ金もすべてつぎこみ、弟や妹にも仕送りをしていたため、自身はいつも借金だらけの生活であった。ジャーナリストとしての功績は認められても、経済的に安楽な日々が長続したことなく一度もない。彼女の半端でない生き方は、迫力満点であり脱帽させられるが、その反面では、親しい人達に大いに助けられ迷惑をかけていたことも真実である。

人種ということで私がふれておきたいもう一つのことは、バックもスメドレーも、アメリカ・インディアンに対して実に共感を抱いているということである。バックは、*Pearl Buck's America* の中のヴァージニア州の章で、ここに初期に入植した人々が先住民に対して実に丁寧で思いやりのある態度で接したことに感銘を受けたと語り、インディアンに関して読んだことの中で一番感動したのは、彼らがアジア人と同様、子供を大変可愛いがり、殴ったりすることをよしとしない考え方だという。それは、現代のアメリカ社会の大人達が、ストレスを暴力的な形で子供に転化する虐待事件が多いことを省みて、白人が見習うべきことだと論じている。この本の全篇にわたって、アメリカの歴史を考察する時、バックがインディアンに対して共感を持ちつつ書いているのがわかるのだが、特に考察が深いとはいえない。たとえば、先のヴァージニアの入植者達の態度にしても、「インディアンのために学校まで作ってやり教育を施してやった」と述べられているのであるが、往々にして白人の考えたインディアン教育というのは、あくまで白人文明をおしつけ、英語を教えようとするものであったことを考えると、単純に賞讃ばかりもできない問題であり、やはり白人の立場からぬけきれていないバックを感じてしまうのである。

スメドレーも若い頃は、彼女の周囲の一般的風潮であった人種偏見をそのまま持っていた。ニューメキシコ州で小学校教師をしていた17歳の頃の弟あての葉書きには、「メキシコ人とイタ公をやっつけろ！」と書いてあったり、インディアンとメキシコ人の混血の美少年に心ひかれる自分を恥じたりしている。が、その3年後、テンペ師範学校の校内誌の編集長に選ばれて初めに書いた論説は、「自分達が受けた教育を、社会でより恵まれない人々のためにいかすように」という主張が述べられ、後半の彼女の使命が表明されていた。そして同じ号で、インディアン研究で有名な人類学者フランツ・ボアズの著作の書評をしており、彼女の心が人種偏見から解放されたことがわかるのである。そして『ロマンス』という創作物語をのせ、母親が子供に向かって、白人である自分がいかに人種偏見を克服してインディアンと結婚したかを語るのだが、そこには、以前アグネスが、メキシコ人とインディアンの混血の少年にひかれた気持が反映しているのである。この後、彼女は自分のインディアンの血統を公けに認め、「アヤフー」というインディアン名で呼ばれることを要求した。ちなみに、

アーネストとの結婚届けにも、アヤフーという名でサインしている。

ニューヨークで雑誌社に勤めた時も、まず書評をやらせてほしいと願い出た本はアメリカ・インディアンに関するもので、彼女はそれを何度も読み、アメリカ・インディアン協会の書記長に自分の読後感を知らせ、彼もそれを正しいと同意してくれた上で評論をまとめたのであった。そして、1933年から34年にかけてモスクワに滞在した時には、現地で知り合ったネスパース・インディアンでマルキストのアーチャー・フィニー<sup>(11)</sup>と交際があった。

スメドレーにおいては、自己の意識改革によって、生来の社会環境に蔓延していた人種偏見からみごとに脱却していったことがわかる。

## ii) アメリカ的精神風土

スメドレーは、『女一人大地を行く』の中で、ニューヨークでインド人と共に働いているときの喜びを次のように語っている。

インド人擁護の我々の運動は日々に進捗して行った。私は以前にこんなに働いたことがない程、一生懸命に働いた。数か月の間、病気に悩まされ、ゆがんでいた私の心は、今では鋼<sup>はがね</sup>の如く強固となり、身体は雑草の如く根強いものとなった。私の生活のすべての信念と熱情とは、今やこの仕事に集中されるに至った。警察から睨まれるとか、社会的な反対を受けるとかいう孤疑逡巡や恐怖は、みな次第に私から消え去っていった。私は同志と共に語り、共に書いた。そして私は自分がアメリカの生みの大地を、型に入れて創造しているのだと感じた。彼らと働いていると、私はいかに自分がアメリカ人であり、この土から生まれた人間であり、そしてアメリカ人の主義、伝統、考え方などに、それらが単に理智的に心を惹く場合にも、いかに心を引かれるかということを悟った。彼らの中には私を姉妹と呼ぶものがあつた。そしてこれは私の心を活気づけ、私というものの中に力と決断とを振興させた。何故ならば、その言葉のうちには、愛のみでなく同志たるの情が籠っていたからだ。私は私の兄弟にも、父にも、私の属する階級にも与え得なかった愛をもって、彼らを愛した。

私は今一つのアメリカを知るようになった。それは小さくはあつたが、生命を持ち、自由のために闘い、何ものをも恐れなかった。<sup>(12)</sup>

ここに述べられている「アメリカ人の主義、伝統、考え方」というのは、アメリカの最もよき部分——建国のときの自由と独立の精神、民主主義と平等の社会——をさしているのだと思う。そしてまた、このようなアメリカを感じたのが、インド人同志との独立のための運動においてであったことも実に興味深い。

一方、スメドレーは、バックのことも「アメリカが生み出した最良の人」と評している。

次の引用は、1943年にスメドレーが友人にあてた手紙の一部である。

……デヴィッド（マクドゥーガル）はパール・バックを知らないうちは、「危険人物」  
 と思っていたのですが、会ってみると、私が感じたように、バックは愛らしく、純粋で、  
 素直で全くずるさやごまかしのない女性だとわかりました。アメリカの生んだ最良の人  
 ですよ。知的で、理想主義的で正直で、下心は全くなく、とてもとても率直なのです。

……

都会の真ん中にあるマンションで彼女に会ったときには、どうしたらあんなに美しく  
 なるのだらうと思いました。昨夜、パール・バックから短い手紙を受け取りました。  
 その手紙は誰が見ても、私のように心の底からいとおしく思うに違いありません。その  
 手紙にはいろいろなことが書いてありました。その中で言うんです。「今ではあなたの  
 ことがわかったと思います。そして、あなたが大好きです。」彼女はウォルシュと二人  
 で、3月24日の私の講演「戦う中国人」に来ると言ってくれました。<sup>(13)</sup>

バックもスメドレーも、民主主義の象徴としてトマス・ジェファソンを尊敬していた。  
 バックにとっては、もう一人、エイブラハム・リンカーンがアメリカの偉大な精神の代名詞  
 であった。だが彼女が永住するために戻ってきた時、アメリカは大恐慌の直後であり、イン  
 テリ達は、ニューディール期を通して、建国当初の理想である自由と平等の観念を、アメリ  
 カの資本主義の制度的な矛盾を克服する方法として適用するための再検討に入っていた。し  
 かるにバックは、そうした動きとは無関係に、19世紀の開拓自営農民が信条としたような考  
 え方を、あまりに無邪気に押し通しているようにみえる。

ここには、バックの歴史のとらえ方、社会経済的視点の甘さがあるように思われる。鶴見  
 和子氏は、中国社会の発展に対してもバックの歴史認識が欠如していることを指摘する。<sup>(14)</sup>  
 国民に奉仕する政府を国民が選びとるのであるから、共産主義政府が民衆に奉仕するならそ  
 れは存続するであろうし、それがだめなら別の政府にやらせてみる、というように試行錯誤  
 的に歴史は進行するものというのがバックの考えであり、ある政権が基盤とする土地所有の  
 形態や生産の仕組、その違い、一つの仕組から他の仕組に変わっていく歴史の発展の契機が  
 考えられていないという。

バックが革命前夜における農村の問題を扱った小説『郷土』においても土地改革の問題に  
 触れていないのと異なり、スメドレーは、中国のコミュニストは、ソ連のコミンテルンの傀儡  
 などではなく、農地改革者であるとみなし、アメリカの政治家達にもその見方を浸透させる  
 のに貢献し、反共の人々からいよいよ反感をかったのであった。

バックは共産主義の中国を決して否定したわけではない。彼女が共産主義に反対する時、  
 それは本当は、ソビエトの国家社会主義制度に対する反対なのであるが、共産主義に対立す

る概念として、彼女が大事に思う“個人の自由”を出してきて、それを擁護する。しかし、黒人解放運動家のエズランダ・ロウブソンに次のように指摘される。バックが自分自身の努力と労働によって個人としての自由を獲得できたのは、そのような特権を持つ集団に彼女が属しているからであり、個人としてはいくら努力し労働しても、自由を獲得できない立場にある大勢の人達がいる、と。

しかし、アメリカ国内の黒人差別と、アジアの有色人種に対するアメリカ政府の抑圧を結びつけて考え、両者をやめさせる戦いを統合していくべきであるというバックの訴えは、アジア人とアメリカ人の間の溝の意味を考え続けてきた彼女にとって最も大事な実践であった。スメドレーも1940年代初めに講演旅行でアメリカ南部を回り、白人の黒人に対する非道な言動に激しく怒り、黒人差別反対の運動を起こしている。

バックの作品に出てくるインテリ達は、社会改革をめざしつつも、過去の自分からの転換がなく、過去の特権を捨て去る発展の契機がないことも、鶴見氏が指摘している。私がここで思うのは、日本における田中正造の生き方である。名主の身分を捨て、国会議員の地位を捨てて、一文無しになりながらも谷中村の民と共に最後までふんばり、明治政府に抗議した正造であったが、一度民衆を理解したつもりでも、やはり自分はわかっていなかった、完全に彼らの立場には立てていなかった、という過去の自分への訣別の契機が何回もあった。そうやって、晩年の写真に見られるような達観した顔の正造に生まれ変わっていったのである。<sup>(15)</sup>

バックにあっては自らの特権を捨て去ることはなかったが、対談の相手としてエズランダのような女性を選び、彼女に対する敗北をありのままに認め公表したところに、彼女の真価があるといえよう。彼女自身が示す自己の限界に対する認識の明かさとは、自分の限界をえぐり出しながら、怒らずあわてず、自分に対して正直な限りにおいて、限界をより少なくしていこうとする努力と実行力——これは誰も批判しえないものであろう。田中正造のように、生活上の特権を自ら放棄することによって、自分達の階級から離脱したインテリは稀有である。自らは生活上の特権の中にあって、しかも大衆とともにありたいと願っている種類のインテリにとって、バックの態度が意味するものは、特権を奪われることを恐れずに正しいと思うことをはっきりと発言し、そのように行動する決意と実行力だと思う。

またバックの唱えた絶対平和、徹底した非暴力は、もっと評価され直してもいいであろう。スメドレーも、戦争によってますます私腹をこやすものは資本家階級であり、命を落とすのは、生活費を稼ぐために入隊する自分の弟や甥のような下の階級の者であることを訴えている。彼女は、冷戦の気配から、朝鮮で戦争が起こる可能性を憂えながら死んでいったのだが、その予想は残念ながらみごとに的中したのである。

スメドレーと共に中国民衆の大義を唱道したジャーナリストの間でも、反共に傾いていく人達がたくさんいた。赤狩りの風潮のせいもあるが、ジョージ・オーウェルが見抜いたような独善的体制、全体主義、スターリンによる粛清、中共の文化大革命を知ることによってなっていった人々もいるのである。スメドレーも、ソビエトの共産主義体制では、女性の差別が続いたままであることを憂慮していた。スメドレーの中国時代の友人で、イギリス人ジャーナリストのフリーダ・アトリーも激しい反共主義者に転じた一人である。が、そのような立場の人から見てもアグネスの偉大さは普遍のもののようなものである。1970年にアトリーが書いた一節を引用して、この論を終わりにさせて頂く。

(アグネスは) その気質のゆえに顔が美しいといえるまれな人であった。男っぽく、しかも女らしく、荒々しかったが魅力的な顔だった。彼女は、まれに見る強固な精神力と真の心の気高さを兼ね備えていた。人間の悲惨と人類の邪悪に対して、聖者や革命家のごく少数だけが備える燃えるような共感を抱いていた。彼女にとって、負傷した中国兵、飢えた農民、働きづめの苦力<sup>クーリー</sup>は、血を分けあった兄弟であった。その悲惨さをわがこととして鋭く鮮明に心に刻み、その痛みを少しでも軽減せずにはいられなかった。抽象的に大衆を愛し、一人一人の苦難には冷淡な純理論的エセ革命家と違って、アグネス・スメドレーは、自分の時間も労働力も捧げ、乏しい収入の大部分を数えきれないほどの個人を助けるために費やした。私が彼女を初めて見たのは漢口<sup>ハンコウ</sup>の川岸で、そこで彼女はみじめな負傷兵達を、自分の金で人力車に乗せ、病院へ送りこんでいた。漢口ではよく見かける負傷兵の姿だったが他の人々は決して助けようとはしないのだった。そうした彼女の行為には知識人も「単純な」人々も深く感動して、負傷兵のためにこのサービスを無料で行う人力車苦力<sup>クーリー</sup>のグループが彼女のまわりに集まってきたのである。<sup>(16)</sup>

## 注

- (1) Pearl Buck, *Pearl Buck's America* (Bartholomew House Ltd., 1971), p. 318.
- (2) 石垣綾子『回想のスメドレー』(社会思想社, 1987), p. 14.
- (3) アグネス・スメドレー著、尾崎秀実訳『女一人大地を行く』(角川書店, 1963), p. 189.
- (4) パール・バック著、松岡久子訳『母よ嘆くなかれ』(法政大学出版局, 1990), pp. 44-45.
- (5) ジャニス・マッキンノン、スティーヴン・マッキンノン著、石垣綾子、坂本ひとみ訳『アグネス・スメドレー 炎の生涯』(筑摩書房, 1993), p. 176.
- (6) 鶴見和子『パール・バック』(岩波書店, 1953), p. 63.
- (7) 同上, p. 58.
- (8) 『アグネス・スメドレー 炎の生涯』, p. 237-238.
- (9) 同上, pp. 324-326.
- (10) Eslanda Cardoza Goode Robeson (1896-1965) は黒人女性で、夫の Paul Robeson (1898-1976)

と共に黒人差別反対のために闘った。1945年にジョン・デイ社から出版された *African Journey* は、彼女が1936年に行なったアフリカでの人類学的フィールドワークの記録であるが、日記形式で自伝的要素も含む。夫のポールはラトガース大学卒、コロンビア大学ロースクール卒で、国際的に活躍した有名な歌手であり俳優。共産党員にはならなかったが、そのシンパで、アメリカの帝国主義を批判した「中国から撤退せよ」という1948年4月のニューヨークでの討論会では、スメドレーと共に演壇に立ち、両者は交際があった。冷戦が始まって圧迫が強まると、スメドレーと同様、却って、ソ連に対する共感を強め、それをはっきりと表明した、彼には *Here I Stand* (1958) という自伝がある。

- (11) アイダホ州のネスパース・インディアン政治活動家。フランツ・ボアズに連れられてソ連に行き、正統的マルキストとなった。政治的にスメドレーと共通点が多い。1944年「全国アメリカ・インディアン会議」創設者の一人。
- (12) 『女一人大地を行く』, p. 389。
- (13) 『アグネス・スメドレー 炎の生涯』, p. 306。
- (14) 『パール・バック』, pp. 133-137。
- (15) 林竹二『田中正造の生涯』（講談社、1976）。
- (16) 『アグネス・スメドレー 炎の生涯』, pp. 248-250。